

第3章 船元式の変遷と展開 ―友岡遺跡出土資料を軸として―

はじめに

第2章で述べたように、友岡遺跡の出土土器は、第Ⅰ群の縄文中期土器が主体を占める。とくに、中期前葉から中葉に位置づけられる船元式に比定されるものが多い。船元式は中四国から近畿地方を中心に分布する縄文土器型式で、独特の原体による縄文を地文にもち、半截竹管状工具によって文様を描出することを型式認定の指標とする。時間的にみると、中期初頭の鷹島式や中期後葉の里木Ⅱ式と、形態や文様構成が型式学的につながり、これらの型式間の関係は深い。したがって、鷹島式、船元式、里木式を合わせて西日本の中期を特徴づける縄文土器様式として認識可能である。このうち、船元式は、船元Ⅰ式からⅢ式に大別され、さらに船元Ⅰ式を3期、船元Ⅱ式を2期に細分し、船元Ⅲ式を合わせた6段階の編年がされている（泉 2008）。本章でも、この編年観にしたがい、友岡遺跡から出土した船元式土器資料を分析して編年的位置づけを確認する。その内容を周辺遺跡との関係のなかでみていくことで、船元式の変遷と展開を考察していきたい。

1 研究略史と研究課題

（1）研究略史

まずは、船元式をめぐる研究史をおさえる。船元式の型式設定および段階設定の手続きを整理することで、船元式の現状と課題を確認したい。

船元式は、三森定男によって設定されたことを始まりとする（三森 1938）。その基準資料は、清野謙次らが調査した岡山県浅口郡里木貝塚出土資料（清野 1925, pp.25–29、三森 1936, pp.20–28）と、三森らが調査した岡山県倉敷市船元貝塚出土資料である（三森 1936, pp.14–20）。三森は、縄文地にほどこす文様の特徴に着目し、弧状線文をもつA式と、爪形文をもつB式に、文様系統を分けている。さらにA式は、①微隆帯と②沈線、B式は、③凸帯と④扁平な爪形文に細分している。これらの分類を、船元貝塚の出土層位から、下層（①, ③）と上層（②, ④）に位置づけ、時期差を想定した。また、里木貝塚出土資料は、②と④の特徴をもつものが主体を占めるとし、船元貝塚上層出土資料と並行させている（三森 1938, pp.41–46）。

一方、三森が船元式を設定するのと前後して、清野の里木貝塚出土資料は上層と下層の土器分類から、山内清男によって、前期の「里木Ⅰ」、中期の「里木Ⅱ」が置かれ（山内 1937, p.32）、里木Ⅰ式とⅡ式が設定された（高橋 1981）。このうち里木Ⅱ式は、加曽利E式とあいだで、文様構成に関係があることを、山内が言及している（京大文博 1960）。こうした見解から、里木Ⅱ式は中期後半に位置づけられ、三森の船元式に後続するものとして理解された。

また、三森のいう船元B式の凸帯をもつ群（③）は、和歌山県有田郡鷹島遺跡で単純なまとまりとして出土したことにより、鷹島式として分離され（巽・中村 1969, pp.32–34）、前期末の

大歳山式と、船元式のあいだに位置づけられて、中期初頭の土器型式と想定された。こうして、鷹島式、船元式、里木式という順の変遷が整備された。

しかしながら、船元式および周辺の時期の資料に関する調査報告は、断片的なものしかなく（間壁 1971）、依然として層位的な発掘調査情報はなく型式細分に対する共通理解は得られていなかった。それを体系的に実施したのが、間壁忠彦と間壁葎子による『里木貝塚』の報告書であり（間壁 1971）、船元式研究における重要な成果である。報告書の中で、間壁らがおこなった編年（以下、里木編年と呼称する）は、里木貝塚の貝層と貝層下の土層にみられた資料の層位的な出土状況と、土器に施文された縄文の撚りと施文具の変化の関係を基本としている。里木編年は、船元式をⅠからⅣ式に四細分し、これに里木Ⅱ式、里木Ⅲ式を合わせて、計六形式（型式）で構成される。里木編年は、諸型式の定義が明快であるので、共通の理解を得やすいという利点をもっている。とくに地文のありかたによって、縄文をもつ船元Ⅰ式からⅢ式と、深浅の条が交互にくる、いわゆる浅深縄文をもつ船元Ⅳ式、撚糸文をもつ里木Ⅱ式、条線をもつ里木Ⅲ式という順序は層序にのっとった変遷をもつので、ひろく支持された。今でも基本的な変遷観に変更はないが、一部、地文の変遷と文様の型式学的変遷が一致していない（泉 2008,p.503）点が課題としてのこっている。

また、里木編年には編年を組み立てる上での資料的な制約に影響されて、問題点もあった。一つは、船元Ⅰ式をA類からH類の八つに分類したうちのB類と、既定の鷹島式（巽・中村 1969）の関係である。B類は、その特徴から鷹島式に一致する（間壁 1971,p.27）が、里木編年では、調査所見を重視して、これを地域差として、鷹島式と船元Ⅰ式の並行関係を想定した（間壁 1971,p.56）。鷹島式を地域差か時期差かどちらで捉えるかという問題は、前期末資料の増加と、高橋護（1981）による鷹島式と前期末土器との比較検討を経て、鷹島式（船元Ⅰ式B類）が先行し、船元Ⅰ式がそれに続くとする変遷観（泉 1981,p.17）が優勢となった。もうひとつ、里木編年をめぐる問題として、船元Ⅳ式がある。船元Ⅳ式は浅深縄文を地文とするのを特徴として船元式のなかの細分型式として設定し、里木Ⅱ式と分離している（間壁 1971,pp.70-75）。これについて、高橋は、山内の里木Ⅱ式の定義（京都大学文学部博物館 1960）をふまえて、船元Ⅳ式を里木Ⅱ式の細分とし（高橋 1981）、泉拓良（1988）もこれにしたがっている。

こうした里木編年による共通理解が得られた一方で、船元Ⅰ式B類や船元Ⅳ式の設定に対する高橋の修正を踏まえて、あらたに器形と文様の変遷に重きをおいた縄文土器様式編年を泉（1988）が提示した。とくに、滋賀県大津市粟津遺跡出土資料の検討（泉 1981,1984）をふまえて、第2様式（船元Ⅰ式）から第3様式（船元Ⅱ式）への連絡が整理された。

こののち、当該期の良好な資料が増加した。なかでも船元Ⅰ式の新相から船元Ⅱ式が主体となる粟津遺跡第3貝塚（瀬口 1997）、船元Ⅱ式を主体とする大阪府寝屋川市讃良川遺跡（塩山 1997）が重要である。粟津遺跡第3貝塚では、瀬口真司（1997）が出土資料の分析、考察をしている。とくに船元Ⅰ式と船元Ⅱ式の関係のなかで、口縁部と胴部の境（口胴部界）内面にみられる稜がⅡ式で消失するとされる変遷観（泉 1988）について、Ⅰ式の段階ですではじまって

いる可能性を指摘している点が注目される。また、従来船元Ⅱ式の指標とされていた刻み目をもつ凸帯、円形刺突列による文様意匠が船元Ⅰ式にまでさかのぼることを指摘している。讃良川遺跡では、船元Ⅱ式的良好な資料が得られたことから、円形刺突列と凸帯による文様意匠の変遷が把握された（塩山 1997, pp.58-63）。こうした資料増加を受け、泉は編年を修正、補強し、鷹島式、船元Ⅰ式（Ⅰ期～Ⅲ期）、船元Ⅱ式（Ⅰ期・Ⅱ期）、船元Ⅲ式、里木Ⅱ式（Ⅰ期～Ⅲ期）の 5 大別 11 細別の編年を提示している（泉 2008）。本稿では、この泉編年の変遷観にしたがい、分析をすすめていく。

（2）研究課題

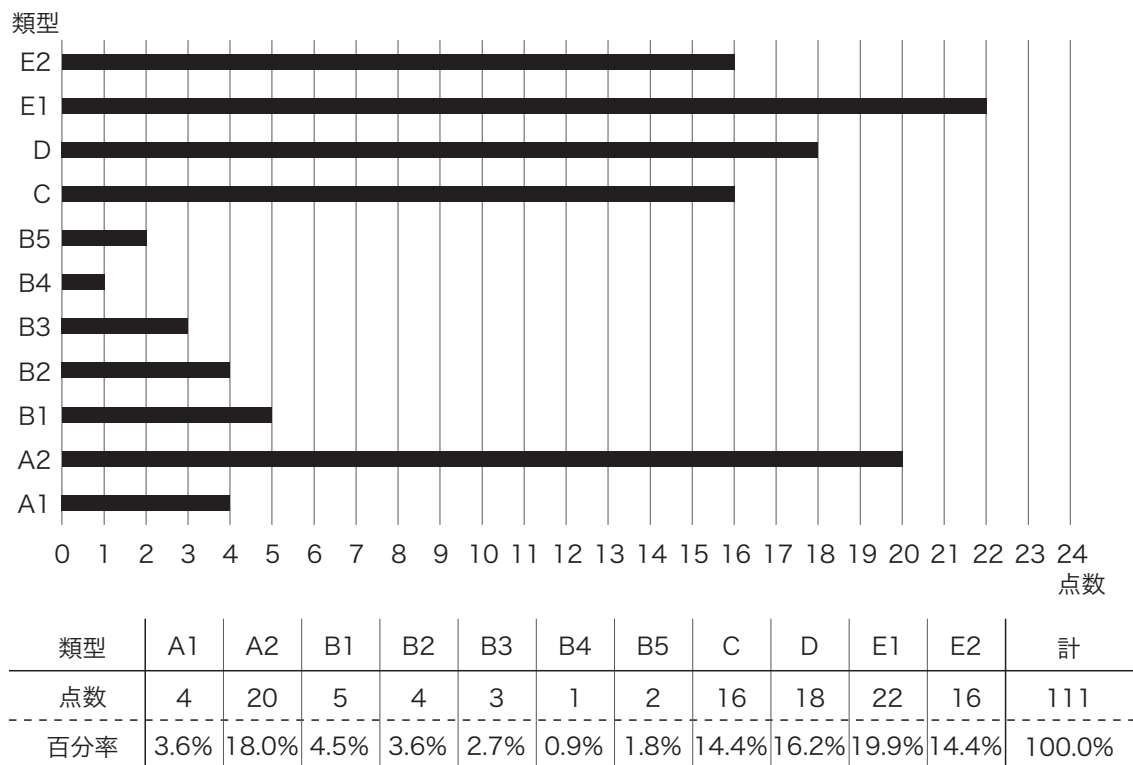
このように、船元式は整理されてきたが、いまひとつ課題がのこる。それは船元Ⅱ式からⅢ式への連絡である。船元Ⅱ式は、船元Ⅰ式までみられた口胴部界の屈曲が弱まること、キャリパー形の器形のほか口縁が外反、直立する器形が生じることを特徴としている。文様構成は、円形刺突列を基調とする、Ⅱ式Ⅰ期と凸帯を基調とするⅡ期に分かれる。船元Ⅲ式は半截竹管状工具による沈線文を特徴としており、文様の種類の違いが明白である。器形はⅡ式のものを踏襲するが、外反、直立する口縁をもつ器形は消極的である。とくに、問題となるのは船元Ⅱ式からⅢ式にみられる三角形の文様意匠である。これは里木Ⅱ式にはみられない（泉 2008, pp.506-507）ものである。一方で、船元Ⅲ式にみられる弧線状文の盛行を考えるうえでは、船元Ⅱ式の文様構成は大きく影響すると考えられる。したがって、船元Ⅱ式とⅢ式のあいだの連絡を追究し、その変遷過程を明らかにすることは重要であろう。

2 考察

（1）友岡遺跡出土資料の検討

第 2 章では、文様構成から、爪形文をもつ A 類、押し引きや円形刺突をもつ B 類、縄文のみの C 類・微隆帯をもつ D 類・沈線で文様を描く E 類の五つに大別して、さらに、A 類を、扁平な隆帯上に爪形文を施文する A1 類・器面に直接爪形文を施文する A2 類の二細分、B 類を、円形刺突列をほどこす B1 類・半截竹管状工具による刺突をもつ B2 類・棒状工具による刺突列をもつ B3 類・指頭状の押圧痕列をもつ B5 類の五細分、E 類を、弧状線をもつ E1 類・三角形状線をもつ E2 類の二細分をし、その内容を詳述した。その構成比率は第 35 図のとおりである。

結果、友岡遺跡の資料は、鷹島式から連続して考えられる土器群である第Ⅰ群 A2 類、C 類、D 類、E 類（泉編年船元Ⅲ式）が多い。このうち、C 類は縄文のみをほどこす一群で時期比定は困難である。また D 類は同一個体と考えられるものが多く、破片数が個体数とはならない。したがって、20 点の第Ⅰ群 A2 類（泉編年船元Ⅰ式Ⅰ期）、22 点の E1 類（泉編年船元Ⅲ式）、16 点の E2 類（泉編年船元Ⅲ式）が多いことが当遺跡の特徴となる。一方で、押し引きや刺突を主体とした B 類は、分類によって、多様性がみられる（B1 類～B5 類）ことが特徴である。ただ全体でも 17 点しかなく、E 類に比べると、当遺跡の主体とはならないことが分かる。この B 類は泉編年でいうと船元Ⅰ式Ⅱ期からⅡ式Ⅱ期に該当し、この時期が友岡遺跡では資料が少ない



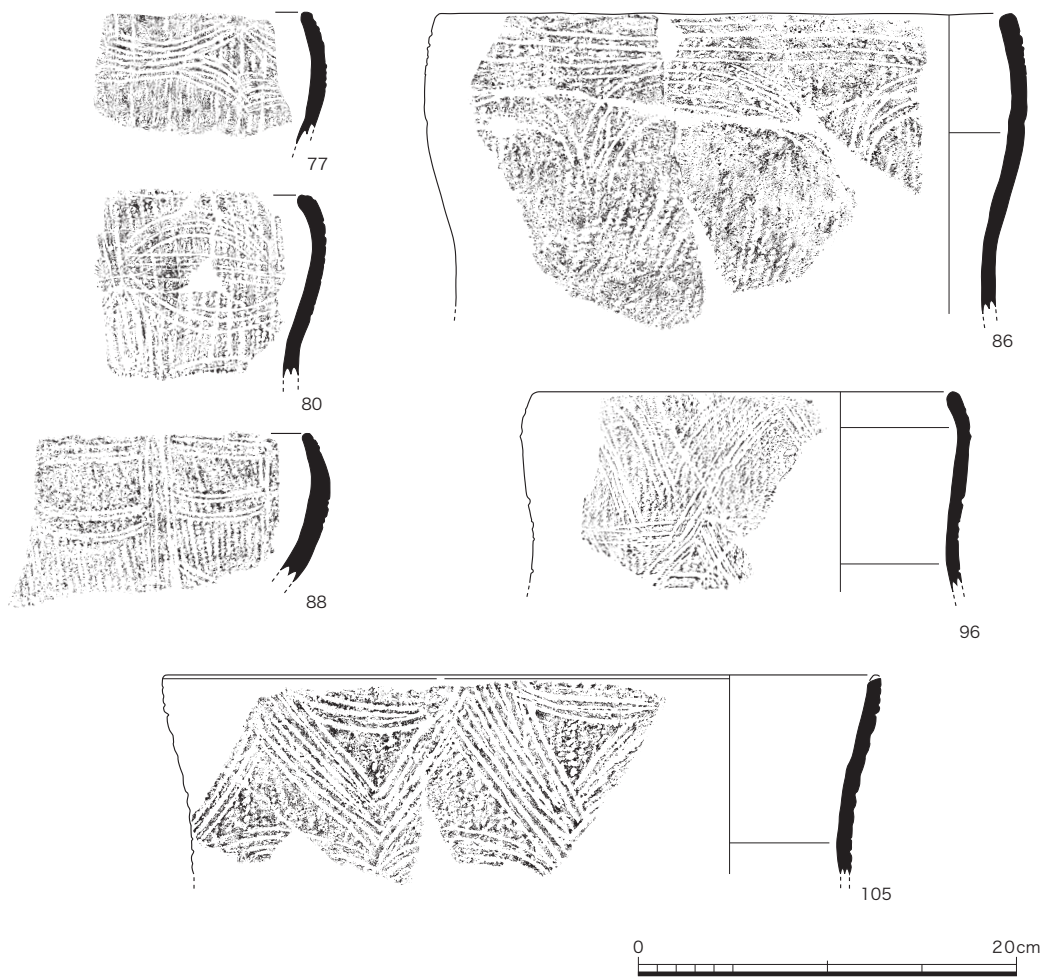
第35図 友岡遺跡出土土器の類型分布

ということとなる。ただし、資料自体は数が少ないながらあるので、遺跡の断絶までは想定しない。第35図でみた類型分布の結果からすると、友岡遺跡出土資料には、時期的なカタよりが見受けられ、船元Ⅰ式Ⅰ期と船元Ⅲ式という二つの盛行時期がうかがえる。

ここでは、前節で抽出した課題である、船元Ⅱ式からⅢ式への連絡について考察をする。したがって、とくにE類を中心に検討をすすめていく。第36図にE類の代表例を示す。77・80・86・88が弧線状文をもつE1類、96・105が三角形状文をもつE2類である。器形は、105がやや外反する口縁部をもち、古相の特徴をのこすが、それ以外は、ゆるく内彎するキャリパー形を呈している。88は口縁の内彎がつよく、より新相に近い特徴をもつ。いずれにしても、船元Ⅲ式の範疇で捉えられる。77は上向きと下向きの連弧が背を合わせて対向し、80は下向きと上向きが口を合わせて対抗する。88は上向きの連弧が多段に構成されている。

この3者は、いずれも複数段にわたって連弧を組み合わせて、文様を構成しているが、80・88には縦位の沈線がひかれ、連弧文が縦に区分されていることに注意を要する。すなわち77は、対向連弧文を横に展開する文様構成をしているのに対して、80・88は縦位沈線によって分断され、縦に展開する文様構成をもつのである。また、86は口縁に沿うように平行沈線を四条ひいており、口縁部の直下に連弧文とはつながらない文様帯を形成している。連弧の単位文様は口縁部の文様帯の下に配される。77と同様に横に展開する文様構成といえよう。なお、77と86は文様構成が口縁部のみにっており、文様が胴部へはつづかない。

96は、三角形状の文様意匠が展開し、横位の多条平行沈線で文様帯を多段化している。105

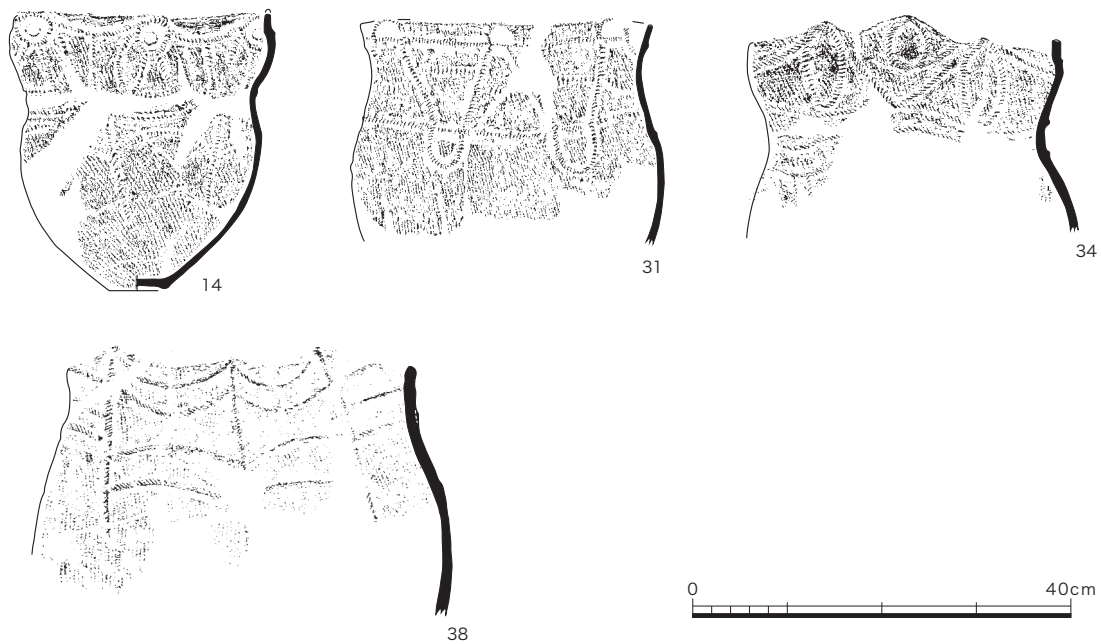


第36図 友岡遺跡出土土器のE類 (1/4)

は96と同様な構成をもつが、横位の区画は沈線ではなく、連弧による。これらは横に展開しながら、多段をもつ文様構成となっている。

(2) 讃良川遺跡出土資料の検討

E類の成立は、D類（泉編年船元Ⅱ式2期）からのつながりを検討することが、その成立を考える道筋のひとつである。しかしながら、友岡遺跡から出土しているD類は点数が少ないのと、小破片資料であるので比較検討が難しい。そこで、船元Ⅱ式の資料を主体とする讃良川遺跡出土資料と対比していくなかで、E類の成立を検討していきたい。第37図には、讃良川遺跡出土資料のうち船元Ⅱ式として挙げられているもの（塩山1997）を載せた。なお、実測図に付した番号は転載元の番号と対応する。いずれも刻み目をもつ凸帯を主体として文様を展開している。14は口胴部界内面にみられる稜の名残から、船元Ⅰ式とⅡ式をつなぐ資料と捉えられている。口縁直下を上向きの弧線で横につなぎ（文様帯Ⅰ）、円形状の文様意匠によって単位文をつくる。口胴部界にも同様な上向き弧線をほどこし（文様帯Ⅲ）、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲをつなぐように縦位の文様（文様帯Ⅱ）を展開している。文様帯Ⅲの下には下向き連弧文を配する。31は、14と同様な文様構成をとるが、文様帯Ⅲの下にくる文様意匠は、紡錘状となり、文様帯Ⅱとの連絡が



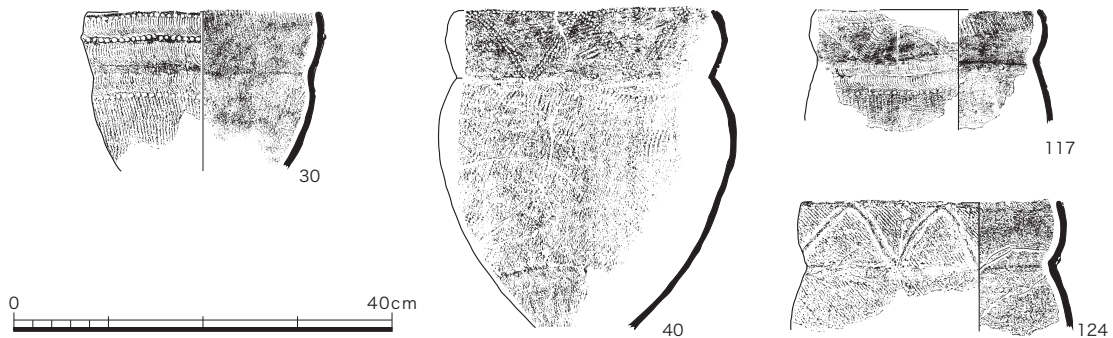
第37図 讃良川遺跡出土資料 (1/8)

読み取れる。船元Ⅱ式Ⅰ期に位置づけられる。こうした文様意匠は、前段階の船元Ⅰ式にみられる爪形文による楕円状文とともに貉沢式、新道式の影響が考えられ（泉 2008, p.504）、中部高地との関係が注目される。とくに文様帯Ⅱに着目すると、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲへの連結が顕著となり、直線化した文様であるのが鮮明となる。ここに、E2 類の三角形状文の祖型がもとめられよう。

第36図96と105にみられた横位の区画は、円形状の文様意匠による単位文で成る文様帯Ⅰ、文様帯Ⅱを受けて平行に文様をひく文様帯Ⅲの名残と考えたい。とりわけ、第37図34にみられる、円形状の文様意匠が肥大化して文様帯Ⅱと同化してしまっている文様帯Ⅰの崩れは、まさに文様帯Ⅰを意識させなくなる過渡期に位置づけられよう。特徴的には船元Ⅱ式Ⅰ期の資料だが、新相を示す資料と考えられる。同じく第36図77や80にみられる口縁部における連弧文が対向して組み合う文様意匠は、文様帯Ⅰの崩れたことを要因として、さらに進んで、下の文様帯とのつながり、口縁部文様帯として再構成していることが読み取れる。したがって、77、80はE類のなかでも新しいと判断される。第37図38は、船元Ⅱ式Ⅱ期に位置づけられる。縦位の区画と、その中に連弧を充填する文様構成をとる。器形の違いがあるため、直接的にはつながらないが、凸帯を沈線に置きかえると成り立つ文様意匠であるので、第36図88と第37図38は同系譜上の文様構成とみなすことができよう。

（3）栗津遺跡第三貝塚出土資料の検討

前項で、船元Ⅱ式で盛行する刻み目をもつ凸帯で構成される文様に、船元Ⅲ式で展開する文様の祖型があることがあきらかとなった。文様構成の基本は、文様帯Ⅰ、文様帯Ⅱ、文様帯Ⅲの関係である。そこで、さらに時期をさかのぼって、そもそも船元Ⅱ式にみられた文様構成がどのように成立するかを探る。ここでは、船元Ⅰ式が主体的に出土した栗津遺跡第3貝塚を検討する。

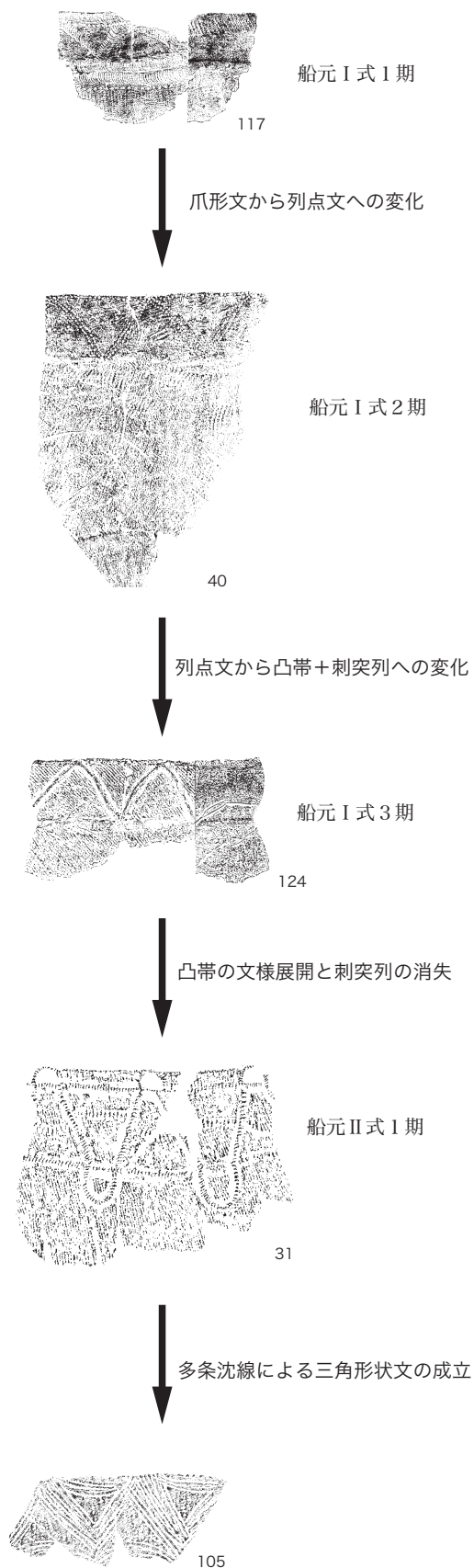


第38図 栗津遺跡第3貝塚出土資料(1/8)

第38図は、第Ⅷ層(30・40)と第Ⅶ層(117・124)から出土した土器である。第36図と同じく、実測図に付した番号は転載元の番号と対応する。30と117は船元Ⅰ式Ⅰ期に位置づけられる。30は平行する爪形文を多段に構成し、口縁部に二列の列点文、胴部に一列の列点文を配し、区画を強調している。前者は文様帯Ⅰとして捉えられ、後者は文様帯Ⅲの原型となろう。117は30と同様に、口縁直下と、胴部に平行する爪形文と列点を配している。口胴部界にみられる二段の爪形文のありかたから、文様帯Ⅲの発達が読み取れる。

さらに、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲのあいだに、波状の爪形文を横に展開し、文様帯Ⅱをつくる。これは、第36図でみた文様帯Ⅱの三角形状文、連弧文の原型をうかがわせる。40は文様意匠が列点のみでほどこされているものである。型式学的に117に後出するもので、船元Ⅱ式に盛行する円形刺突列との関係がうかがえる。しかしながら、器形が船元Ⅰ式の典型であるのと、口縁部に描かれた鋸歯状の文様意匠が同時期の波状の爪形文と類似する。また出土層位もふまえて、これを船元Ⅰ式Ⅱ期に位置づける。

124は117の文様意匠を、凸帯で表現したものである。口縁直下には列点文がめぐる。船元Ⅰ式Ⅲ期に位置づけられよう。これらの資料から、文様帯Ⅰが列点文を基準に構成されていることが分かる。この列点文は、船元Ⅰ式Ⅰ期に盛行するC字状爪形文の支点を由来として(泉2008,p.505)成立したと考えられる。さらに30の爪形文の形状がI字状に近づいていることから、C字状爪形文+支点→I字状爪形文+列点の文様変遷が想定できる。したがって、三角形状文の出自は、波状の爪形文に求められ、沈線による三角形状文は、文様帯Ⅱの発展とともに成立した文様意匠であると結論づける。文様帯Ⅱを構成する波状の爪形文は、40や124のように列点や凸帯で替えるようになる。そして第37図で示したように、やがて凸帯による文様意匠へと統一されていく。凸帯による文様意匠は、文様帯Ⅱの直線化を強める方向へと変遷していく。こうして船元Ⅲ式にみられる沈線による三角形状の文様意匠をもつE2類が成立していく下地ができるのである。



第 39 図 三角形状文の成立過程

3 ま と め

本稿では、E2 類の主な文様要素である三角形状文に主眼をおき、その成立と展開を考察した。結果、三角形状文の出自は波状の爪形文に求められること、それが文様帯Ⅱを構成する重要な要素であることを示した。

第 39 図は、これまでの分析結果をまとめて、三角形状文の成立過程を示したものである。船元 I 式 1 期の段階でみられた波状の爪形文は文様帯Ⅱとしてあらわれる。船元 I 式 2 期になると、刺突列の盛行により、文様帯Ⅱを刺突列では縄文をつくりだすものが出てくる。第 39 図の 40 は、その一例である。三角形状文の形成を明瞭に示すために、分かりやすい例を求めて、刺突列のみで構成されている 40 を挙げたが、同時期に凸帯も組み合わせあって展開するものも多くある。したがって、祖型としての三角形状文はすでにみられるが、必ずしもこれが主体となるわけではない。

重要なのは、当該期に文様帯Ⅱが定着することである。船元 I 式 1 期では、並行する爪形文を多段につける文様帯Ⅰが発達し、文様帯Ⅱも同様な構成となって、明確に分離していないものも多い。船元 I 式 2 期は、その文様帯Ⅱが明確に文様帯Ⅰから分離する時期として評価できよう。船元 I 式 3 期では、波状文が凸帯により表現されるようになり、文様帯Ⅱが主文様帯となる。このことは、つづく船元 II 式 2 期の、文様帯Ⅱの文様構成に影響する。

第 37 図でみてきたように、船元 II 式で、文様帯Ⅱの文様が大きく展開する。一方で、文様帯Ⅰや文様帯Ⅲと連絡をもち、文様帯Ⅱが独立した文様帯を維持できなくなる時期でもある。第 39 図では、31 から 105 への変遷から、文

様帯Ⅱの変化を読み取れる。ただし、31は船元Ⅱ式Ⅰ期資料であり、105の船元Ⅲ期資料とのあいだに時間的な隔りがある。現状では、船元Ⅱ式Ⅱ期で、三角形状文へ直接つながる良好な資料がないが、第37図34をさらに明瞭にしたような、文様帯Ⅰと文様帯Ⅱがひとつの口縁部文様帯へとなる資料をあいだに介して、船元Ⅲ式の三角形状文が成立してくることを想定したい。なお、船元Ⅲ式以降は、文様帯Ⅰがくずれ、文様帯Ⅱと合流し、口縁部文様帯として再構成されることで、一連の変遷を完了する。つぎの里木Ⅱ式では、口縁部文様帯と胴部文様帯というふたつの文様帯で展開していくことをふまえると、この文様帯Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは、船元式の特徴的な文様構成であるといえよう。一方で、本稿では、船元Ⅲ式より盛行する連弧文は、触れなかった。これは、連弧文の盛行する里木Ⅱ式を合わせて考えるべき問題であり、先行研究で指摘されているように（京都大学文学部博物館1960、高橋1981、泉1988）、東日本との関係のなかで読み解くべきである。今後の課題として、本稿を終えたい。

（妹尾 裕介）

- 注1) 泉 拓良 1979「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』1 日本原始 小学館 pp.142-172
- 2) 泉 拓良 1981「付章 栗津遺跡出土遺物 1. 縄文土器」『遺跡確認法の調査研究昭和55年度実施報告』文化庁 pp.13-20
- 3) 泉 拓良 1984『栗津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会
- 4) 泉 拓良 1988「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館 pp.307-310
- 5) 泉 拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.502-509
- 6) 春日井 恒 2003「第5章まとめ 4 縄文時代中期後葉の土器」pp.225-228
- 7) 鎌木義昌 1969「西日本における二大土器分布圏」『新版考古学講座』3 先史文化 雄山閣 pp.163-167
- 8) 河口貞徳 1988『鹿児島』日本の古代遺跡 38 保育社
- 9) 河瀬正利 2006『吉備の縄文貝塚』吉備考古ライブラリィ 14 吉備人出版
- 10) 清野謙次 1925『日本原人の研究』岡書院
- 11) 京都大学文学部博物館 1960「里木貝塚」『京都大学文学部博物館資料目録』I 日本先史
- 12) 佐原 真 1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3 後期 講談社 pp.162-167
- 13) 塩山則之 1997「讃良川遺跡」『寝屋川市史』1 寝屋川市史編纂委員会 pp.52-98
- 14) 瀬口真司 1997a「第7章 第1節 土器」『栗津湖底遺跡第3貝塚』本文編 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.93-180
- 15) 瀬口真司 1997b「第10章 第2節 第3貝塚出土の船元式土器」『栗津湖底遺跡第3貝塚』本文編 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.363-398
- 16) 高橋 護 1981「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』2 中期 講談社 pp.164-165
- 17) 巽 三郎・中村 貞史 1969『鷹島』鷹島遺跡発掘調査報告書 南紀考古同好会
- 18) 田中良之 1980「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』九州大学文学部考古学研究室編 鞍手町埋蔵文化財調査会
- 19) 田中良之 1988「阿高式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館 pp.307-310
- 20) 原 秀樹 1990「右京第325次（7ANNKG-3地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 pp.56-57
- 21) 間壁忠彦・間壁葎子 1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7
- 22) 三森定男 1938「先史時代の西日本」『人類学先史学講座』第2巻 pp.33-72

- 23) 三森定男 1936「西南日本縄文土器の研究」『考古学論叢』1 pp.12-48
- 24) 矢野健一 1993「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚』I 愛媛大学法文学部考古学研究室報告2冊 pp.157-175
- 25) 山内清男 1937「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 pp.29-32

※実測図は各報告書より転載、筆者による再トレース、表現統一のため、一部改変